

---

# 日向の郵便屋さん

Nerine

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日向の郵便屋さん

### 【Zコード】

N4085BA

### 【作者名】

Zerine

### 【あらすじ】

一匹の綺麗な郵便屋さんは、今日も2人の間を行き来します。2人の為だけの、2人の為に頑張る彼女は、彼等にとつて大切な存在でした。彼女の願いはただ1つ。声を合させて2人で呼んで。そして、静かに眠りにつくのです。

アーモンド型でブルーとイエローのオッドアイの瞳。長い尾にスラリとした体、そしてシルバー・クラシック・トビーの美しい毛並み。

近所でも評判な美人猫の私は、今日も赤い首輪の鈴を鳴らしながら、2つの家を渡り歩くの。

尾をピンと張り、凛とした姿勢で、誰も寄せ付けない高嶺の花として。そこらの雄猫なんて、相手にもしないわ。

だつて私には、大切な人から任された大切な仕事があるんだもの。

「よろしくね。引っ搔いたりしたらダメだよ？」

そう言われたのは、いつだつたかしら。

暖かい陽気の、天気の良い日だつたはず。

大切な人でありご主人でもあるその人は、突然私に仕事を与えたの。

お気に入りの首輪には、白い紙。

ご主人は、猫の私からみても、とても嫌い空気を纏っている人だつた。毎日をベッドで過ごし、私もその部屋でご主人の横にいた。

勿論、外に出た事なんてなかつたわ。出よう思つたことだつてなかつた。

なのに、ご主人は突然私を外に出したの。

とても、悲しかった。

私じゃ、ご主人の寂しさを埋められなかつたんだもの。

「ご主人は運命信じて、私に手紙を届けるよつお願いした。会つたこともない、知らない誰かに宛てた手紙。

始めは、すゞく怖かった。

だつて、なんだか大きな固まりがすゞい速さで走つてたし、大嫌いな犬だつて、沢山いた。

「車には気を付けてね？」

まつたく、私が賢い子じやなければどうなつてたと思うの。

そう、ご主人に腹を立てたりもした。

でも、それも最初だけ。

私は、しつかり役に立てたの。当然のことだけどね。

「あら？ 可愛らしい猫ちゃんね」

それは、本当に運命だつた。私は今でも、そう思つわ。

丁度、可愛らしい家の窓辺に、白いひらひらしたもの追いかけ立ち入つた時。そこに、その人はいた。

私の大切なご主人の大切な人。

運命の、人。

「それはね、紋白蝶つて言つてみのひのよ。可愛らしい猫ちゃん」

とても、とても良い匂いの人だつた。

そして、ご主人と同じ位僨い空氣を纏つた人。

ここにくるまでの間、何度か首の手紙をとられそうになつたけど、誰にも許さなかつたのに。

この人には、読んでもらいたいって思ったわ。

だから、初めて自分から、ご主人以外の人に擦り寄つたの。

「とても、人懐っこいのね。ふふ、本当に可愛い」

冷たいのに温かい、そんな手だつた。

この私が思わず喉を鳴らしてしまつくらい、気持ちがよかつたの。

「あら、これは手紙？」

そしてやつと、その手紙に気付いてくれた。  
でも、始めは読もうとしてくれなかつたわ。  
だから必死に手紙を外して、咥えて差し出したの。

「……まあ」

その人は、読んでくれたわ。そしてとても嬉しそうに、慌てて紙とペンを用意して何かを書き始めた。

覗きこんでみたけど、私は猫だもの。勿論内容は分からなかつた。

でも、達成感で一杯だつたわ。

だつて私は見事、ご主人の期待に応えられたんだもの。

そしてその日から、何度も何度も、私はご主人とその人の間を行つたり来たりした。

二人の嬉しそうな、楽しそうな顔が見たかったから。後、たまにもらえるご褒美の二ボシ欲しさもあつてね。

次第に一人は手紙だけじゃなく、お花も私に託すようになったわ。鼻がむずむずしたり、歩きにくかったり、とても苦労したのよ。でも、一生懸命頑張ったわ。

「主人は、たまに私にこいつ言つていたわね。

『キミのお陰で、僕は愛しい人と巡り合えたよ』

その感情は分からぬけど、とても嬉しそうに笑つていたわ。でもやつぱり、どこか寂しそうだった。

「猫ちゃんのお陰で、最近は毎日楽しみなの。今日は来るかな？  
つて」

あの人も、そうだった。だから私は、一人がそくならないようお願いつたのよ。

寂しくないよう、儂さが消えるよう。  
一生懸命。犬に吠えられても、子供に邪魔されても。

でもね、それも今日でお終いなの。

私の仕事は、もうお終い。

だつて、私の大切なご主人は、もういないから。  
私に最後の手紙を託して、眠ってしまったから。

どうしてなのかしら。

私達は、終わりを悲しく思わないのに。

人と違つて、それを怖く思つたりしないはずなのに。

なのに、とても悲しくて、寂しくなつた。  
でも、苦しくはないのよ。

だつて、ご主人、とても嬉しそうだったもの。  
もう撫でてくれないけど。おいでと言つてくれないけど。でも、  
嬉しそうに笑つてた。

だから私は、絶対に、この最後の手紙を届けたい。  
大切なご主人の、大切な人に。私にとつても大切になつた、あの  
人に。

そしてとうとう、あの人の家に着いた。いつもと変わらず窓辺にはお花が咲いていて、白いカーテンが揺れています。

「あら、猫ちゃん。また来てくれたのね」

そして、そう声を掛けてくれるはずだつた。  
でも、どうして どうして今日に限つて、その声が聞こえない  
の？

ほら、鈴は鳴らしているのよ？ この美しい毛並みで擦り寄つて  
いるの。

なのにどうして、ご主人みたいに動かないの？ なんで、いつも一人だったのに、今日はたくさんの人があなたを囲っているの？ どうして囲つて、泣いているの？

ねえ、起きて。起きて、手紙を読んで。

ご主人の、最後の手紙。愛しいって言つていた、あなたに宛てた、あなただけが読んでいい手紙なのに。

「……猫？」

そんな時、見知らぬ人が私を抱き上げ、そして手紙と花に気付いてハツとしていた。

ご主人の大切な人の周りには、今まで私が届けた手紙が、まるで花びらみたいに添えられていたわ。

「そうか、君が娘の言つていた可愛らしい郵便屋さんか」

その男の人はそう言つて、あの人の胸元にその手紙をそつと置いた。私が一生懸命運んだ、向日葵という花も一緒に。

あれから長い月日が経つた。

あの人もご主人と同じ日、同じ暖かい日に旅立つたの。

結局、二人がどういうやり取りをしていたのかは分からない。どういう気持ちを抱いていたのかも、分からないわ。

でも、どうしてなのかしら。最後の手紙だけは、読めたのよ。誰も開かずに、の人と一緒に燃えてしまつた手紙。見なかつたのに、分かつたの。

二人は空の向こうで、会うことが出来たかしら。  
私がするように、一人で顔を擦りあつて、気持ちを確かめ合えた  
かしら。

私ももう数分で、一人の元に行くでしょう。

美しかった毛並みも、宝石みたいな瞳も、もう美しくはなくなつてしまつて。尾だつて、ピンと上げることが出来なくなつたもの。

私も、会えるかしら。会いたいの、とても。  
ご主人が思つたように、私も一人に会いたいわ。

そして今度は、二人に抱かれてみたい。一人ずつじゃなく、二人一緒に。

そしてまた、たまにでいいからお仕事をお願いして。  
絶対に、届けるから。

二人の嬉しそうな顔と冷たいけど温かい手が、恋しいのよ。

だから、ね。

一人を想つて、眠ることにするわ。一人みたいに、私も。晴れや  
かで喜ばしい気持ちで。

またいつの日か。今度は一人で笑つて、話しましよう。  
この子の名前は、ソルテ。君と僕の、ソルテ。

声を合わせて、二人で呼んで。

ご主人が最後の最後で付けてくれた、大切な人に宛てた私の名  
架け橋になつた、その名を。

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

他サイト様から移行してきた短編です。

恋愛だけど、恋愛じゃない感じなので、ジャンルは一応文学ということです。

今回のお花は向日葵。トルテちゃんは、虹の橋の向こうで、きっと2人に会えたことでしょう。

よければ、『意見・』感想・評価をお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4085ba/>

---

日向の郵便屋さん

2012年1月10日20時54分発行